

<北海道大学>

主題の選択とその制作過程をめぐって

—ひとつの地域社会からの報告—

本 田 錦一郎

1.

数えて5年前、あわただしい旅立ちであった。当時、学長であった北大名誉教授・有江幹男氏は、北海道大学放送講座を開始するに当たって、「試行的企画」としてこれをとらえ、「放送によって教育を広く公開することは本学としても初めての試みであり、このシステムを今後より良いものとするための研究的、実験的な目的も含まれておりますが、主目的は学ばんとする方々に対する大学教育の公開であることは申すまでもありません」と、「受講案内」（昭和58年）の巻頭で語っておられる。

そのねらいは、今日に至るまで、一貫しているものの、「試行的」実験も、ぼつぼつ、何がしかの結果を出さねばならぬ段階にさしかかっている。

言うまでもないことながら、メディアはテレビとラジオの二分野にわたり、それぞれの主題に応じ、その効果を考慮して、いずれかに振り分けられる。

まず、テレビは、「北海道の資源——その開発と保存——」（昭和58年度）「からだの科学——健康への道しるべ——」（昭和59年度）、「低温とくらし」（昭和60年度）、「情報化社会に生きる——経済とくらし——」（昭和61年度）、「そして本年のテーマである「文化としての北——北海道の地方性を問う——」と受けつがれ、他方、ラジオは、「現代英米小説講読」（昭和58年度）、「北海道文学の系譜」（昭和59年度）、「法律夜話——法のことわざと民法——」（昭和60年度）、「近代ロシアの歴史と文学」（昭和61年度）、「そして本年度は、引きつづき近隣に眼を向け、「中国の古典を読む」が、現在、進行中である。

放送担当局の北海道放送（HBC）のご苦勞は言わずもがなであるが、聴講生の応募から始まって再視聴に至るまで、すべての雑務をとりしきる数すくな

い担当の大学事務局（掛長，主任の2名と事務補助員1名），それに，特殊な専門領域を，定められた主題につなげ，孤立しつつある学問の全体像の回復につとめ，あまつさえ，札幌，旭川，函館，帯広，留萌，（昨年からは）北見にまで出向いて，スクーリングにより講義を徹底させようとしている講師陣の労苦はいかばかりかと，これらの方々への謝意の言葉を私は知らない。

これをまとめてこられた委員長も，すでに三代にわたり，初代の名誉教授・石川純氏，二代目の現医学部長・広重力氏のご努力によって，ほぼその基礎を固めていただき，ようやく，それらしい形姿を整え，今日に至っているのが現状である。

2.

しかし，「それらしい形姿」とは何であるか。いかにも置かれている地方社会にふさわしく，北海道の資源を分析し，低温の生活を考え，北海道文学の系譜をたどり，隣接のロシア文学を論じることか。わけのわからぬ「地方の時代」という錦の御旗の下に，ひたすら地方性を発掘するだけが，私どもに課せられた仕事なのであろうか。

おそらく，そうではないであろう。たしかに，特殊の底辺に普遍の光を発見する作業は，地方社会にとって第一義的な任務であり，不可欠な義務のひとつであることに間違いはあるまい。けれど，時には，普遍の光にてらして特殊を見る眼も，学究たちにとって，視聴者にとって，望ましく，必要欠くべからざる営為のひとつであることに変わりないはずである。

一般論的に，「からだの科学」を論じ，「情報化社会」をいかに生きるかを考え，日本および世界の動向のなかで，小さな地域社会に光をあてる試み，これまた，本講座の主要な作業の一環と言わねばならぬ。そのためには，近隣の中国をはじめ，未開発なアジア文化圏や，年老いてなお根強いヨーロッパの文化の細部などを，模索していく努力も，今後の課題として残されているのではないか。いずれにしても，視座をはじめから限定せず，すでに63年度に予定されている「北海道の産業構造」の見直しとか，「教育問題」など，時事的主

題から、例えば「創造性」とか「青春の復権」など 普遍的問題に至るまで、テーマはいたるところにころがってしよう。

さて、そこで問題になるのが、総合化という作業である。「学問」という性格からしても、あるいは「文化現象」の常としても、特殊化にむかう傾向を、誰が阻止できるであろうか。現代の教育体制のなかで、仮りに私の専門の英文学の領域で考えてみても、シェイクスピアしかわからぬ学究がいることは確かであり、もっと極端に言えば、彼の喜劇や悲劇や晩年のロマンス劇をさしおいて、史劇しか研究対象としていない教師がいるとしても、なにも不思議ではないのだ。つまり、「ヘンリ四世」劇にはくわしくとも、その「ソネット詩集」となると、常識的文学史的見解を出ない。という現象がおこりつつある。

理学部門に例をとっても、たぶん、その事情は変わるまい。そこでも、物理学、化学、地質鉱物学、生物学、陸水学、火山学、気象学、高分子学……と、気の遠くなるような特殊化がおこる。さらに、その最後の高分子学科ひとつを例にとっても、高分子固体物理学講座、高分子溶液物理学講座、高分子化学講座……と分化し、特殊化現象はその行方を知らない。レオナルド・ダ・ヴィンチは現代に不向きなのである。

これをいかに総合化し、ひとつの主題に統合するか。しかも、それぞれの学究が、その重い腰をあげて、街なかを、いかに歩いていただくか。ここに、放送大学講座の最大のアポリアがある。

学究に大学の研究室を出ていただくだけでも難しいのが現状であり、ましていわんや、その特殊化された学問の水準を決して低下させることなく、あるひとつの主題につなげ、あまつさえ、それを、いかに平明な言葉で伝達していただくか、この苦しきは、真剣であろうとすればするだけ、絶望的な気分になるというものだ。総合科目というカリキュラムが、文部省推薦で盛んな昨今であるが、もし失敗したとすれば、大体、それは、各講師の意に反して、特殊化されすぎた学問の読切講談の印象を、学生諸君に与えてしまうところに、その原因があるのが普通なのである。コーディネイター、ないしは、オーガナイザーの苦悩を思い描いてほしい。

教師が、各分野の専門的な話をして、それを自分自身の能力で統合し、より高度な知性、あるいは、感性にまで高めうる学生となると、まず当今では、期待できない。とするなら、平均20代から70代に及び、学歴も高卒から大学院卒にまで分化している放送大学の視聴者に、どうして、このような統一と総合をおしなべて強制しうるだろうか。放送講座の仕事は、実にそこから着手されなければならないのである。

3.

「学問に王道なし」と、私たちの第二代目の委員長・広重力教授は繰返し語った。その通りなのである。「どのような学問にしたところで、ピラミッドのように底辺をもち、人間の素朴な願望や意志と無関係であるわけがない」と、私が主張する根拠もそこにある。

けれども、これはいかにして可能か。抽象的な議論を避けるために、ひとつの実例を紹介し、参考に供したいと思う。いま制作中のテレビ講座「文化としての北——北海道の地方性を問う——」を、あえて素材として取りあげ、恥をさらしてみよう。

この主題は、オーガナイザーとしての私には、すでに10数年前からあたためられていた素材であった。それは、自分の存在の拠点である「北海道」という地域社会のもつ風土的歴史的個性の特殊性と、そこに住む、かつては東京人であった私を含めた人々（道民）の文化の混合の在りようを確認することであり、さらに、ハイ・テクノロジー文化のなかでの歴史、あるいは文化の風化（無化・摩滅）現象を、どのように診断し、どのように位置づけるか、という難題を含んでいる。

まず切口が問題となる。テレビにせよ、ラジオにせよ、それがたといドラマであれ、ドキュメントであれ、単なる日常的な報道番組であれ、切口、つまり構成力の脆さは生命とりとなるからだ。

かつて「北海道論」は数限りなくあった。しかし、それらが、しばしば、局部的で、時には文学的風土論であり、原住民族論であり、ないしは経済理論な

どに終始するのが常であったことを、私は自分の発想のテコとして、いかにすれば世界的視座に組みこまれたひとつの北海道像、あるいは、日本文化のなかでの北海道像を発掘しうるか、同時に自分の思惟や感性の拠りどころとしての北海道を把握しうるか——これらの問題に焦点をしばっていった。

そして、その手順としては、安易と言えば安易であるが、これもひとつの〈試行〉であり〈挑戦〉であるなら、まず第一の方法として、風土論上の問題（私はこれを横軸として考えている）を、印象主義的な「北辺性」という言葉ではなく、気象、地質、植生などを軸とした地球物理学的な視点として設定した。当然、北海道は、グローバルな観点に立つなら、北なのか南なのか不分明であり、日本的な観点に立つなら、どの部分までが北であり、どの部分までが本州との漸移帯を形成しているのか断じがたい、などの難関が待ちかまえているはずである。

次に、ヒトがこれといかにかかわってきたか、という先史・文化人類学上の問題が不可避的に用意されなければならない。それでなければ「文化」としての北を論じるわけにはいかないのである。とはいえ、最近の考古学上の驚異的な諸発見は、決して平淡な道程では、解決の方向を示してはくれまい、と今から覚悟をきめている。

第二の方法は、歴史的なアプローチによる。（私はこれを縦軸として取扱う）。この段階で明白になってくることは、たぶん北陸経由の近江の文化、新潟、秋田、津軽など東北海岸を起点とする海洋文化が、北海道周辺の地方に根強くはりつめ、北海道文化に先住し、明治維新ともなれば、舞台は内陸に移り、屯田兵、ひと旗組、無資本の流民、それにバタ臭い欧米の教養、アメリカ亜流のフロンティア・スピリット等々、私どもの文化は、完全にそれぞれ出自を異にする母村文化の混合を形成していく。もちろん、原住民族の問題、アイヌの人々の残した遺産も頭痛の種となろう。

これに加えて、世界第二次大戦とその敗戦は、北海道への移住を推進し、いまや北海道の文化は、本州の文化の残滓を、さらに複雑化しつつある。もし文化が「ある一定の地域に住む人々の、歴史的に形成してきた生活の仕方、たと

えば日常の行動様式、つまり、挨拶の仕方とか祭礼の在り方とか、建造物の様式とか、食生活とか、これらすべてを包含する有機的複合体である」（『文化としての北』、北大放送教育委員会編、昭和62年、P. 106）くらいに定義しうるなら、北海道の文化は、日本文化の一環、すなわち、淡彩な地方性というより、油絵具のように、各地方性がさらに混合され複合化された、こってりとした多様性として認知されなければならない。

第三のアプローチは、現代文化の加速性と無関係ではない。文化は否応なしに、ハイ・テクノロジーの渦中であって、文化の根が浅ければ浅いほど、知性や感性の奥行をもたぬ子供たちの個性が周囲に影響されやすいように、画一化や無化の方向をたどることは必定であろう。しかも、北海道の文化の根は、複合的ではあるが深いとは言えない。従って、現代が育成した貴重な遺産としてのハイ・テク文化が狙いうちするように、その地方性を枯渇させ、やがて無に帰するのではないか、という不安は残る。私が、最終的には、「文化としての北」というメイン・タイトルに、〈北海道の地方性を問う〉と副題をつけたのも、そこに理由があったのである。（ちなみに、このひとつのタイトルの決定にしても、本来、切口の決定を意味しているし、放送局側との知恵の出しあい、20をこえるタイトルから、ようやくここにおさまった、というのが実情である。）

4.

この主題を、放送講座として、いわゆる言葉に依存しすぎた「講義」で語りつくすのは至難なわざだ。テレビ局との葛藤がここから始まる。卓抜なプロデューサー兼ディレクターとのたびかさなる議論を通し、映像が限られた予算枠で周到に用意され、可能な範囲で言葉を映像で語らせようというのである。そして第一の関門である「序説」を終った。VTR収録も、ようやく第2章から第5章にたどりつき、あと残されている収録は歴史の部分と、現代社会構造のなかでの地方性の問題であり、これには近代日本史家と地域社会学者とヨーロッパ近代思想史家があたる。そして最後に私はもっとも映像化の困難であろう

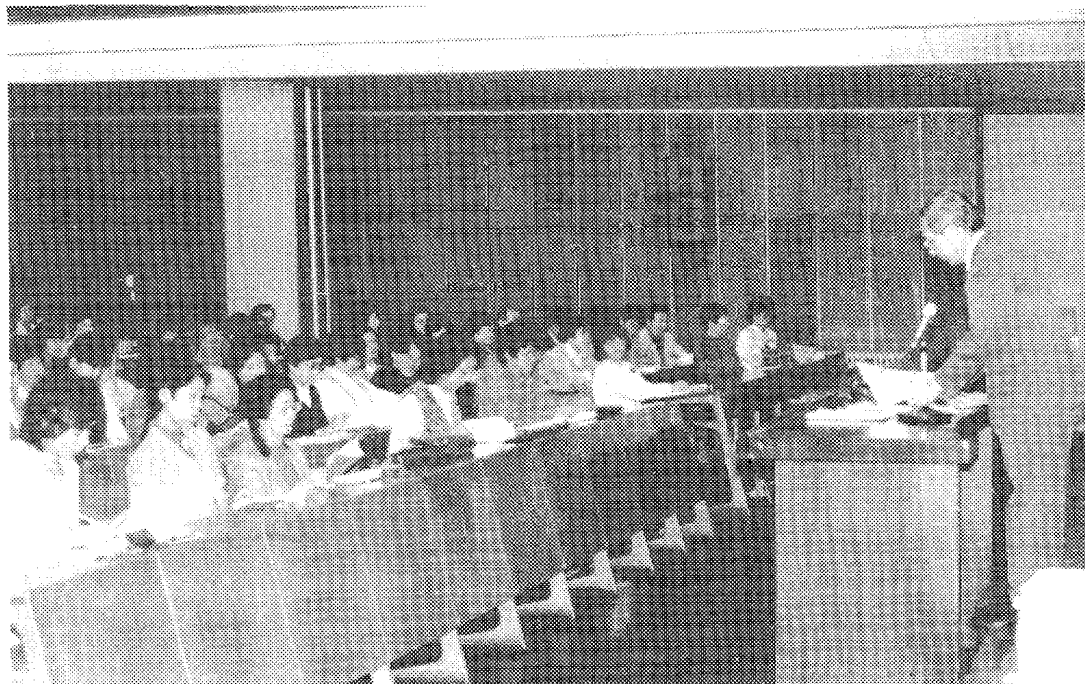
文化の意味する原点に立ち帰って、最終的には、文化病理学的視点から北海道文化の健康診断に触れることになるだろう。再びプロデューサーとの激しい角逐を想うだに、身がほそる。

しかし、それでも問題は必ず残されているはずだ。この残された課題を、2回にわけてシンポジウムの形で討議し、すべての学問がそうであるように、これを明日に、実りあるものとしてつなげなければならない義務があるだろう。

5.

ざっとひと通り、今回の経験をそのまま具体的に、いそぎ足でデッサンしてきたが、おそらく昭和58年から4回にわたる制作も、涙ぐましい思い出が、制作者側にも講師諸氏にも、いや、視聴者側にもあったに違いない。

過去4年の事務局の精細な調査が、それを証明してくれる。というのも、ラジオ、テレビとも、放送、スクーリング、再視聴、研究会(各地方在住のチューターを中心とした学習会)をへて、(1)理解度がテレビでは70.2%、(2)満足



開講式・スクーリング風景

度が97.4%，ラジオでは、(1)理解度が91.3%，(2)満足度が95.7%の高い数字を示しているからである。これにかかわった人々の苦勞の軌跡が、そのまま数字にあらわれている、と言ってよいであろう。

とは言いながらも、今後の放送講座に問題がないわけではない。以下、これを列記して参考にさせていただきたい。

- (1) 視聴しやすい放送時間帯の確保（ラジオの放送時間帯——毎週日曜日 20:00～20:45 はよいとして、テレビの毎週日曜日 23:40～0:25 が問題）。
- (2) 放送教育に対する大学の取りくみ方（放送教育に対する大学内における評価・位置づけが必ずしも明確でない。いわば、放送教育の果たす役割に対する認識の不足）。
- (3) 将来、放送大学が全国ネットになった場合の本学放送講座の役割。
- (4) 「北海道大学」放送講座を、いかにして「北海道」大学放送講座に発展させることができるか。
- (5) 各学習地区におけるスクーリング強化に伴う旅費等の確保と充実、等。

もちろん、もっとも重要な鍵を握っているのは、放送局と大学側の密接な協力体制であり、すでに(2)で指摘しておいた大学人の意識の問題にあるだろう。

最後に、蛇足ながら、生涯教育の声の高まっている今日、ひとつ予算の配分にしたところで、日常化している事務職員の超過勤務、放送局側の過重な負担、担当講師へのそれなりの配慮も、今後の緊急課題として、ひとこと申し添えさせていただきたい。